

論 文

近代における朝鮮本の流通—日本との関わりを中心に—

渡 辺 滋

はじめに

本稿では、全近代の朝鮮半島で作成された、いわゆる「朝鮮本」の流通について、とくに近代日本との関わりを中心に検討する。

まずは、近代以降の状況を論じる前提として、前近代のあり方を確認しておく。日本への朝鮮本の流入は、現存事例を見る限り、おおよそ中世後期以降に生じている⁽¹⁾。たとえば大内氏(周防国)は、日朝貿易の過程で朝鮮本を入手しようである。その具体例として、東洋文庫所蔵の『緇林寶訓』・『続三綱行実図』・『唐駱賓王詩集』などに、大内氏旧蔵(毛利博物館現蔵)の「日本国王之印」・「太宰大弐」などの印が捺されていることは、早く和田惟四郎が指摘する通りである⁽²⁾。これらの本は大内氏が一六世紀頃に朝鮮半島から輸入した本と思われるが、大内家の滅亡後、蔵書印によれば曲直瀬家・鈴木真年(一八三一〜九四)・木村素石(一八四三〜一九〇三)などの手を経て、稲田政吉↓和田惟四郎↓岩崎文庫(のち東洋文庫)と所在を移転したようである⁽³⁾。

中世末期、豊臣秀吉による朝鮮出兵(一六世紀末)の際も、ある程度の朝鮮本が日本にもたらされた。この出兵の際、宇喜多・安国寺・小早川・毛利・上杉・島津などの諸家が占領地で蒐書を行ったことは、すでに先学の指摘に詳しい⁽⁴⁾。このうち、とくに大量の蒐書を行った宇喜多・安国寺の分は、のち前者の所蔵本が曲直瀬家の所蔵に、後者が徳川家康の所蔵に帰したとされる⁽⁵⁾。ただし、この際の蒐書は韓国側で言われるほど大規模なものではなく、また日本軍の持ち帰ったラインナップを見る限り、すでに出兵以前の段階で半島における典籍の残存状況が悪い状況にあったことが推定される⁽⁶⁾。

こののち近世に入ると、数度の通信使が個人的に持ち込んだ事例を除き、朝鮮半島の文物は宗氏経由で入手する方式が一般的になる⁽⁷⁾。ただし朝鮮王朝が情報の流出を怖れたこともあって、中期以降は事実上の書籍禁輸処置が行われ⁽⁸⁾、朝鮮本そのものの流通は滞っていく。

こうした経緯をたどって、本稿で検討対象とする近代に入る。この時期の日本側による蒐書は、一部で朝鮮総督府などの公的機関による管理も生じていたが、おもに民間人によるものである。数量的には、日本に現存する朝鮮本の大半はこの時期に購入されたものと考えられる。朝鮮戦争後の朝鮮半島における書籍の残存状況の悪さと比較して、保存状態の良好な事例が多いという特徴が認められる⁽⁹⁾。

第一節 開国期(一) … 外交官による蒐書

朝鮮半島において書籍が市場に回る状況を最初に確認したのは、開国(一八七六年)後に赴任した外交官たちだった。たとえばモリス・クーラン(一八六五〜一九三五)は、フランスの外交官で一八九〇〜一九〇六年に渡って、断続的にソウルに駐在していた人物である。その間、おもに京城において収集した朝鮮本の分析を進め、最初の本格的な研究『Bibliographie coreanae』を刊行した⁽¹⁰⁾。本書のなかで、彼は朝鮮本入手の困難さを、延々と吐露している⁽¹¹⁾。

まず冒頭、「朝鮮ニ長ク住メルモノ朝鮮ニ書籍アルヲ疑ヒ、又其業務上朝鮮土人ト往復関係アリ且ツ其言語ニ通曉スル人モ僅々ノ朝鮮本アルヲ知ルノミ、此ノ如キ奇異ノ現象ハ如何ナル原由アリヤ」と述べるところから始まる。長く駐在している外国人でも、「朝鮮本」というモノがあることを知る人はあまりおらず、そもそも本自体を目にすることが少ないというのである。続けて彼は、店で書籍を売る場面を見ることはあるが、多くの場合、帽子・タバコ・マッチなど無関係の品とごちゃ混ぜに並んでおり、それもハンゲルで書かれた安手の本に限られているとも述べている。さすがに首都京城には漢字・漢文で書かれた本を扱う書肆があるとはいえ、その数は少なく、品揃えも良くないとする。

こうした描写は、開国直後の朝鮮社会において書籍出版や売買に関する社会

的な仕組みが整っていない状況や、いまだ李朝が存在する背景もあって、所蔵者（旧来の支配者層）が書籍を手放そうとしない状況を物語っている。ただし彼もさらっと指摘するところだが、この時期には、旧来の支配者層の没落が徐々に進行し、その蔵書がある程度は入手可能となりつつある状況も生じつつあった。

こうした状況下、日本人外交官も朝鮮本の収集に乗り出していた。竹添進一郎（一八四一～一九一七）は漢学者としても著名な人物だが、朝鮮国駐節の弁理公使として一八八二～八五年、京城に駐在している⁽¹²⁾。その間、相当な数の朝鮮本を購入し、日本へと持ち帰ったらしいことについては、様々な証言がある。たとえば一九〇三年に朝鮮で古書の仕入れをした三浦兼助（其中堂）は、以下のように述べている⁽¹³⁾。

朝鮮で古本を沢山買ったのは、二三十年も前に在任して居られた竹添（進一郎）公使と云ふ事だ。外国の商人として古本買を目的として渡韓せしは僕が嚆矢だ。同じくこうしでもどこやらが違ふ。日本の軍人で目下在韓の柴原某は、なか、珍書を沢山買集せられたと云ふ事だ。又一昨々年の春、仏蘭西の神学者（？）某は、文献通考（唐本）を五百七十弗（一千九百元）で買って行つたと云ふ事だ。その他外人で、古本を買集した者は無い。と京城の本屋は云つて居た。

ここに見えるように、仕入れ先の古書店がここ二・三〇年で最大の購入者とも記憶するのが竹添だった（なお「仏蘭西の神学者（？）某」は、クーランのことかもしれない）。本書の頭注に付けられた抱生（奥田一夫・名古屋の文人）のコメントには「予が彼地に赴きしは、竹添公使の時なりしなり。唐本骨董杯沢山ありし」とあり、クーランの述べるところとはやや異なり、すでに一八八〇年代の段階で古書・美術品など名家から市場への流出が、始まっていたらしいことが伺える。そうした社会的な背景もあって、竹添は相当なコレクションを築いたと考えられる。なお彼の蔵書は、帰国後、自宅（東京）と別荘（小田原）で保管されていたが、後者は一九〇二年の天津波でほとんど失われ⁽¹⁴⁾、前者は松方正義の手を経て、一九〇七年に静嘉堂文庫へ納められた⁽¹⁵⁾。そのため、現存する竹添旧蔵書は、多くが同文庫に現蔵されている。

このように開国後、李朝末期における社会秩序の変動もあって、支配者層の所蔵品が少しづつ市場に出始める状況も現出していた。どのような社会におい

ても、秩序の変転期においては、文化財の類の入手が比較的容易に実現する。日本の場合も、幕末から明治初期にかけて、数多くの美術品が国外に流出している⁽¹⁶⁾。その背景には、価値観の変化から、旧来の家蔵物品への所有欲を低下させる現象があると推定される。その結果、市場に回った物品は、他文化圏の人々の好奇心の対象となり、国外へと持ち出されることになるのだが、朝鮮半島からの書籍流出の場合、とくに初期には先に紹介したクーランの事例のような西欧諸国への流出が目立ち、日本は後塵を拝したとの認識も示されている⁽¹⁷⁾。

とはいえ一九世紀の段階では、朝鮮本の購買層はそれほど広くなく、京城に赴任した外国人外交官の蒐書などに限定されていた。ところが二〇世紀に入ると、こうしたあり方から、さらに次の段階へと移行することになる。

第二節 開国期（二）…古書店による仕入れ

二〇世紀に入ると、日本人による朝鮮本入手への試みが本格化しはじめる。これまでのような現地赴任の外交官などに限定された状況から、商業資本の関わる商売としての「朝鮮本」の売買が始まるのである。その背景には、日本国内における朝鮮本の不足⇨価格高騰現象があった。和本や唐本とくらべて、そもそも絶対量が少ない朝鮮本であるから、それが比較的安価に入手できるのであれば、割の良い商売となるという発想である。当時の状況を、日本側の書肆は以下のように証言している⁽¹⁸⁾。

明治二十九年（一八九六）頃…その時分には今と違って、朝鮮版が割合に少なく、非常に珍重がられて、余り古くないものでも値段がなかなか高く、かえって五山版に負けない位でした。一冊大概五円程度でした。…世間の空気がそういう時には、特別に良く見えるものでした。

同じような証言は、他にもある。たとえば白鳥庫吉（一八六五～一九四二）は、以下のように述べている⁽¹⁹⁾。

朝鮮の書物といふものは自分は二十年来之を得ようとして力めて居つたのであります。明治二十三年（一八九〇）か四年頃からして朝鮮の書物をどうか得たいと云ふ希望を有つて居りました。…其頃から朝鮮の書物が得たいといふ考を起して居つたけれども、どうしても得られない。友達に頼んでもどうしても入らない、むかふの朝鮮人などを介しても矢張りいませぬ。それで非

常に遺憾に思つて居つた。

以上の証言をふまえれば、現在は世界屈指の朝鮮本のコレクションを保有する日本においても、一九世紀の段階では、先述した竹添のように実際に現地へと赴いた人物を除いて、まとまった数量の朝鮮本の入手は困難を極めたことが分かる。

このような社会背景をうけて、二〇世紀初頭の朝鮮を訪れ、現地で朝鮮本の仕入れを行った書肆の一人に、古家実三（一八九〇～一九六六）がいる。その証言によれば、彼が一九一二年に渡航する以前、すでに三名の古書肆が仕入れを行っていた²⁰。

日本の古本屋で、朝鮮へ古本の買入れに出かけたのは、明治三十六年名古屋の其中堂主人三浦兼助氏が先鋒であり、東京の村口氏先代が第二陣、続いて東京の磯部亀吉氏が第三陣で村口、磯部の両氏は私の行った前年に別々に出かけられたと聞いてゐる。要するに私はやつと四番目に過ぎない。

ここに記される通り、日本人古書肆として先陣を切つたのは三浦兼助（其中堂・名古屋）だった。彼の入手できた冊数は多くなかったが、「其中堂さんの先代が朝鮮へ行かれまして、「国朝宝鑑」と、「高麗史」でしたか「東国通鑑」でしたか、ハッキリ記憶致しませんが、買って帰られたので、大変な評判でした」²¹とあるように、最初の快挙として国内でも高く評価された。一九〇三年六月九日～一七日まで行われたその仕入れに関しては、彼自身の回想も残されているので、詳細を確認しておこう²²。

京城を訪れた三浦は、「書林と認むべき程の物は更に無し。京城中書林全体で蓄ふる所の新古の書籍（雑誌の如き日本物を除き）は一見せしところ吾が店の蓄蔵する所の十分の一にも足らずと思はる。京城の書林の規模の少さき事、これを見ても知るに足らん歎」と述べるように、書店数の少なさや、その品揃への悪さに驚きを隠せない。

その後、「仲立人」という職業の人物が登場する。彼の元を訪れ、「大形の朝鮮本にしてウブな無疵な上本」の『高麗史』を「現今は内閣にも、他の大臣豪家にも皆て無き韓国無二の珍本」と、しきりに吹聴してきたのである。こうした展開からは、二〇世紀初頭の京城には、雑誌や安価本を扱う小型書店は幾つかあっても、高価な書籍を扱う書店は存在せず、その種の良本は持ち主と仲立人を介した交渉で入手するのが通例だったと判明する。

こうした社会的あり方を知つた三浦は、やむを得ず、「朝鮮文の新聞へ古本買集の広告をし、また辻々へは諺文の広告文を貼附せしめ、仲立人と云ふもの三四名を使用して頻りに古本買収に尽力」²³するという方針変更を行った。しかし最近版行されたハングル本を除けば、「三日にして一も獲るところが無い」状況が続く、やむを得ず「茲は一番応挙の軸でも買ふ気になつて、商売気を離れ、娯楽の為と云ふ心持ちで高麗史を買つてやらう。と、一念発起したもんだから、直段には拘らず（先に持ち込まれた）高麗史以下四五十点購求」という顛末をたどつたのだ。商売的には、期待した成果を上げられなかった渡航となつたとはいえ、先鞭を付けた意義は大きい。こののち、複数の書肆が彼の後に続くことになる。

三浦に続き、一九〇九年頃に京城を訪れた村口半次郎（村口書房・東京）は、おもに朝鮮半島に存在した唐本の仕入れを行つてゐる²⁴。仕入れた本は高値で飛ぶように売られたので、村口はその後数回にわたつて朝鮮半島への仕入れに赴き²⁵、現地では「在庫品全部でいくらにするかと言つたような放胆な取引きもした」と伝えられている²⁶。なお村口と同じ頃、朝鮮半島で仕入れを行つたと伝えられる磯部亀吉（磯部屋・東京）については、あまり関連情報がない。磯部は徳富蘇峰の蔵書形成に大きな役割を果たした書肆だが²⁷、確認できたのは唐本をめぐる情報ばかりで、朝鮮本に関わる情報は確認できなかった。あるいは村口と同じく、おもに唐本の仕入れを行つた結果なのかもしれない。

彼らに続いて登場するのが、先に挙げた古家実三である。彼が朝鮮を訪れたのは、一九一二年三～四月にかけて、つまり日韓併合の直後ということになる。当時、古書肆の間では、朝鮮本が驚くほどの高値で売れる状況が注目を集めていた。そこで古家も、「朝鮮本がそんなに高く売れるものなら、今朝鮮へ買いに行つたら相当儲かるに違いない」というような野心がむらむらと起り、
：もう矢も楯もたまらず、思い切つて単独で出かけることを決意し、急に『日韓會話』などを買つて来て準備にとりかかつた」²⁸のであった。三月一五日（誕生日）に自宅を出発し、バックパッカーのような行程を経て、三〇日に京城に入った古家は、翌日から本格的な仕入れを始めている。

古家は、すでに京城に入る前から、ある懸念を持つていた。釜山への上陸後、市場で古書を散見する限り、期待したような安値で入手できる事例が多くないようなのである。日記にも、「書籍の価を問ふと、四書四五十円、左伝七十余

巻四五十円、史記評林五十余巻三四十円といつてゐた。これで愈々朝鮮には本が稀で非常に高価であることを知った」(『古家実三日記』同年三月二四日条)と記している。ここからは、当時の朝鮮半島において、慢性的な書籍不足から価格の高騰が生じている状況を伺える。おそらく外国人を中心とする朝鮮本の購買層が一定の厚みに達し、一方で需要に見合う朝鮮本の市場への供給(Ⅱ両班層による家蔵本の放出)が実現していない状況が現出していたのであろう。

ただし、この頃になると「其中堂の渡鮮時代(一九〇三年)から較べると古書店は数の上でも質の上からも非常に発展ぶり」で、古本の入手自体には、以前ほど困らなくなっていた。彼の回想にも、白斗鏞・朴鳳秀といったそれなりの古書店の経営者が登場している。このうちの朴は忠清北道に本貫を置く人物で、当時は京城府寛勲洞で古書・古美術品の売買や新刊出版などを生業としていた。彼に関する古家の叙述を掲げておこう。

パゴ公園の東に古本屋があると聞いてゐたから訪ねようとしたが、途中で一人の鮮人が手真似で古本屋を教えてやるからこちらに来いというからついでゆくと広学書舗の裏手に当る狭い露地を右に折れ、左に曲つて漸く一軒の茅屋に連れこまれた。初めは一寸薄気味悪く感じた程だったが、書棚に古本が積み重ねてあるのを見てほっと安心した。その男の自宅だったこともわかった。男は別室から続々大形の朝鮮本を運び出して来た。随分珍書と思はれるものもあつた。暫くしてから日本語のわかる男も出て来て値段の交渉に入った。……この主人は朴鳳秀と言つて一寸変つた性格の男であつた。併し一面親切なところもあり、学識もあつたようである。筆談に依つて朝鮮古来の人物、学者、それ等の人々の名著などをいろ、教えてくれたのがあとで随分役に立つた。

以上の情報によれば、朴は自宅を商売の拠点としていたことが判明する。これ以降の時期に京城で暮らした人々の回想によれば、朴は大学の研究室・博物館などのお得意先を回る販売形態を採つていたのである⁽²⁹⁾、ここで古家が連れて行かれた自宅は、店舗というよりも倉庫機能を担つていた場所と考えるべきだろう。日本でも、高価な典籍を扱う古書肆の場合、一般客を対象とする店舗を持たない場合が少なくないので、その類だろう。また、こうした営業形態からは、二〇世紀前半の朝鮮における古典籍類が、一般の朝鮮人ではなく、日本人の研究者などを主要な購買層として流通していた可能性も想定できよう。

ともあれ以上のような経緯を経て、日本国内の朝鮮本が増加し続けた結果、かつて高値で取り引きされた朝鮮本は大幅な値崩れを起こしていく。「判然とした古版は別として、普通の朝鮮本は昔に反して型は大きいし邪魔物扱いにされて、誰も買う人がなくなつて、終には、つまらぬ物は一時に悲惨な位下落」⁽³⁰⁾し、入札の際は、「朝鮮本でありますから誰も真面目に札を入れません」⁽³¹⁾などという状況も、日常茶飯事となる有り様だった。日本に現存する朝鮮本(四〜五万冊)の大半は、この時期に購入されたものと考えられるが⁽³²⁾、それだけの冊数が一時期に流入すれば、値崩れしても当然だろう。

一方、もともと数量不足だったところへ、開国以降は国外持ち出しが続いた結果、朝鮮半島における朝鮮本の不足は相当なレベルに達していた。かつて併合当初に半島を訪れ、朝鮮本が期待よりも高値で取り引きされる事態に不平を鳴らしていた古家実三は、その一二年後に京城を再訪した際、書店などが以前よりも増加している状況を「著しい変貌」と述べている。一方、古家は「この頃の京城の古本価格は内地よりは遥かに高く、朝鮮本の如きは内地で次第に下落したにも拘らず朝鮮では逆に暴騰していた」⁽³³⁾とあるように、古本相場の高騰を目的としたりし、驚きを隠せないでいる。彼は、その背景について「両班(やんぱん)即ち韓国時代の旧官吏の蔵書も一応出つくし、その上日本人古書店の進出で圧倒されたものであろう」と分析している⁽³⁴⁾。彼の推定は、朝鮮総督府の『朝鮮史』編纂関係者の認識とも一致している。この時期の歴史編纂事業においても、旧支配者層の没落に伴う所有史料の散逸が大きな問題と見なされ、散逸前の史料の騰写・撮影が喫緊の課題とされていた⁽³⁵⁾。

このように、開国(一八七六年)から併合(一九一〇年)に至る過程において、社会的な地位を低下させた識字層(両班層)が蔵書売り払い続けた結果⁽³⁶⁾、朝鮮本の国外への大量流出が生じ、受け入れ側での飽和状態を招いたのが一九二〇年代だった。これに対し、供給元にあたる朝鮮半島では、主要な蔵書家がおおよその蔵書を売り切つた結果、市場への朝鮮本の供給が途絶え、相場の高騰を生じさせたのである。

第三節 日本人移住者や研究者による蒐書

本節では、朝鮮半島に移住した日本人が、以上確認してきたような状況をどのように捉えたかについて見てく。日清(一八九四年)・日露戦争(一九〇四年)

を経て李氏朝鮮が力を失い、最終的に日韓併合(一九一〇年)へと至る時期、日本が朝鮮半島への政治的・軍事的支配を拡大する過程において、日本人の半島への移住が急速に進んでいく。そうした移民たちのなかでも、朝鮮では主要都市においてすら本格的な書店が存在しないということが、大きな社会問題と認識されていた。たとえば日清戦争前の京城に移住した本間九介は、書籍入手の困難について、以下のように述べている⁽³⁷⁾。

京城には書肆兩三軒あり。是等書肆の状態、我邦日影町の古本屋に如かざること遠し。而して其鬻ぐ所は、多く零本缺冊に過ぎざるなり。其他八道何れの都会と雖も書肆を見ず。左れば内地の人々は、行商者が通鑑節要、孟子諺解など二三の本を市日に携へ来るを待受けて、始めて購求し得るのみ。書籍を購ふの不便なるは、此の如くなること以て、詩文章の如きは、他人の筆記を騰写して、之を講習すると都鄙共異なることなし。彼等邦人か文化の恩恵に、浴せざる此の如く、自ら無智蒙昧に安んず。憐むべきなり。

これによると、(A)一九世紀末の京城には、非常に品揃えの悪い小規模な本屋が二〜三軒あるだけで、それ以外は全国各地にも書店らしい書店が存在しないこと、(B)ある程度まともな本を入手しようとすれば、市場に行商人が持つてくるのを気長に待つか、持ち主から借り出して書写する以外にないという状況などが記されている。一八九四年に京城に移住した鮎貝房之進も、同様のことを述べている⁽³⁸⁾。

私の書籍蒐集は大抵書買から購めたのですが、矢張り数冊づ、風呂敷に包んで売りに来て居りました。書店は自分が来た頃は既にあったように思ふ。丁度黄金町一丁目から鍾路の方に向ふ大通りに二三並んで居ました。朝鮮本もあつたが多くは新刊本を買つて居ました。

鮎貝によれば、自分の購入したいような古書は、店を持たない巡回の業者が直接持ち込んできたことや、表通りに店を構えている書店では、そうした古書ではなくおもに新刊本を売っていた状況が確認できる。その一〇年後、同じく京城に移住し日韓書房を開いた森山美夫も、似たような実態を証言している⁽³⁹⁾。

私の朝鮮にやつて参つたのは、明治三十九年(一九〇六)の九月であつた。その時分この京城に本屋というふものは、僅か二軒しかなかつた。それも実は名ばかりで、極めて微々たるもので、在京内地人の希望を満たすような新

刊書籍は殆どなく、今の古本屋のちよつと体裁のよきもの位で、その上、本の価はといふと、定価に郵税を附加するから、馬鹿々々しき値段であつたのである。…当時朝鮮人側の需用といつたらた話はならぬ。まあ日語の教科書位であつたのだから吾々本屋とは殆ど没交渉と云ふ有様であつた。…統監府時代より総督府時代に涉り普通学校の増設、高等普通学校の新設と共に教育が普及するようになったから、日本語研究熱盛となり、…今日では朝鮮人は吾々の善き於得意となるに至つた。

森川の場合、話の中心は自らが売買する新刊書についてはあるが⁽⁴⁰⁾、内地人から見た古書(古典籍ではなく、明治以降に刊行されたような洋装本の古いもの)を売買する書店が数軒あるだけという、まともな書店が存在しないことを述べる点で違いはない。こうしたあり方は、とくに古典籍の研究を生業とする研究者に対して、相当な不便を強いたようである。たとえば先の本間の友人である白鳥庫吉は、朝鮮本をどうしても入手したいと考え、日露戦争の直後、京城を訪れた際のことを述べている⁽⁴¹⁾。

京城に参りまして朝鮮の書物屋といふものを訪問して見たが、其書物屋なるものが殆ど是は雑貨店のやうなものであつて、誠にささやかなもので少しも骨つばいところの書物などは蔵して居らぬのであります。先づ之を嚴格に申せば朝鮮の国には書物屋がないと云うても宜しいやうな有様であつた。それですから京城の都に於て書肆から書物を得るといふことは全く是は望めないことでありました。

このように、需要(古典籍を欲しい人)と供給(古典籍を売りたい人)のバランスを採つて利ざやを稼ぐことを生業とする古書肆が未形成の社会において、古書を手しようとする場合、(多くは仲介者を介して)古書を買りたい人を探し出す必要が生じる。こうした際の具体的なあり方については、すでに日本人の古書商が仕入れる際の事例を見てきたが、ここでは研究者が直接アプローチした際の事例を確認しておこう。先に挙げた白鳥庫吉の回想で、彼が京城での蒐書に古書店が利用できないと理解した後の対応についてである。

それから朝鮮に居るところの人を介して、諸方かけずり廻つた末到頭一人適当な人がありまして、是は貴族であつたらしい、其人が書物を蔵して居りまして、其人に談判をして書物を四、五十部ばかり得て参りました。是はどうも自分は非常に愉快に感じたのであります。此書物は成田の図書館に囁し

てありますけれども、自分が今使用して居ります。

それから其後尚もつと得ようと云ふので一昨年（※一九〇八年）の十二月二十九日です、差追つて日本を出発してさうして又京城へ出掛けて書物を漁らうと致しました。さうすると此京城の有様が余程三十九年に行ったときよりは變つて居りました、前にささやかであつたところの書物屋なども余程大きくなつてやつて居るやうであります。それで一日其書籍屋の前を通つて見たところが、『高麗史』が其処に転がつて居る。是は余程妙なものがあつた、それからどうだ是は幾らであると斯う云ふと、是は百二十円だと云ふ。それは少し高い負けないか、負けれないと云ふ訳でなか、鼻息が強い。それでは仕方がないからそれで買はうと云つて買つたのです。

さうすると其亭主が私の顔を見て居りました、ぢつと見てあなたは斯ういふ書物を未だ欲しいか、欲しいどころかあれば幾らでも買ふ、それでは私の所に土蔵がある、其処へ案内をするから来て見て呉れと云ふので、其亭主に案内されて土蔵へ行きましたところが、其土蔵の中には一ぱい朝鮮の書物が充満して居る。無論漢籍もありましたが、非常に自分は喜んで先づ生れてから此位愉快なことはなかつた。随分西洋に書物を注文して其書物が自分の手に入つてそれを開くときは随分喜びでありますが其時位ではない。自分が渴望して居つた朝鮮の書物を得ようと思つて居つたところが、一時に一つの土蔵に一ぱい入つて居つた。それからそれを調べると云ふのでありますが、自分一人では調べきれない。早速使者を友人の所へやつて斯ういふ書物を自分が見付けたから来て呉れ、是は向ふに長く居りました本間九助と云ふ人でありましてなか、朝鮮通であります。其先生が朝鮮に長く居つたのでありますから朝鮮の書物のことを知つて居るから来て呉れと云うて、其先生を呼んで二人で調べた。所が此先生は其本屋の前を何遍となく通つて居るけれども其土蔵のあることを初めて知つたと云ふ。嘗に其本間と云ふ人が初めて知つたばかりでなく、京城のどんな人でも此書物屋の土蔵に朝鮮の本を蔵して居るといふことを知らなかつた。所が偶然にも私が其土蔵を見付けた、さうして其書物を悉皆調べましたところが外の詰らぬものは悉皆除けて約五千冊がありました。それを悉く買ふと云ふ約定を致しました。

—買ふといふ約定を致しましたが私は金が無い、金を持たないで約定するといふことは余程大膽でありましたが、併ながら此書物といふものは多く得

られない。なか、朝鮮には多くの書物が無いから、どうでも斯うでも本国に持つて来たが宜い。持つて来た上に於ては誰か買ふ者があるだらう、自分が買はなくても誰かに買はせると云ふので約束してしまひました。それで自分は前後一週間ばかり滞在して、学校の都合があるものでありますから東京に帰つて来ました。それから又本間と云ふ人を介して外の友達が向ふの学者の家で書物を売りたいと云ふので其書物を見た、それ等のものを二軒ばかり合しまして、さうして書物が段々殖えた訳であります。

少し長い引用となつたが、以上の説明によれば、仲介人を介して売却希望者を募り、それに応じた蔵書家が名乗りを上げるという展開が確認できる。また一件の取り引きが成功すると、それが呼び水になって、別の売却希望者が出てくるといふ構造も分かる。こうした芋づる式の現象は、蔵書家が両班のなかでも、とくに一部の階層に集中していたことも関係するらしい。たとえば朝鮮本の蔵書家として著名な存在だつた鮎貝房之進（一八六四—一九四六）は、「朝鮮の人での蔵書家といふのは大抵宦官が多かつた。彼等は宮廷に出入し、王にも近侍したからでありませう、学問もある蔵書も多い人が多くあつたようです」⁽⁴²⁾と述べている。勿論、蔵書家が宦官に限定される訳ではないが、学者にしる宦官にしるそれぞれのネットワークがあり、李朝崩壊後も内部における情報交換は行われ続けていたであろうから、その一端との取り引きが平和裏に成立すれば、周囲からも売却しようとする人が出てきたのである。

勿論、すべての古書購入を希望する者が、一々売却希望者を探しては話にならない。ここで述べた白鳥のような事例は、大口の購入に限つた例外的な対応と考えるべきだろう。一般には、さきに鮎貝が述べたように、また前節で取り上げた朴鳳秀の採つた販売方法のように、書買・書僧などと称される存在が、どこかの旧家から仕入れてきた古書を、買つてくれそうな日本人の元を訪れて、販売して回るといふ方式が一般的だつたと考えられる。

こうした方式は、併合以前の段階から存在し、また日本統治期の最後まで続いてきたと考えられる。このことは、一九四〇年に朝鮮本の入手法について言及した文章からも確認できる。以下に、該当箇所を掲げておこう⁽⁴³⁾。

朝鮮古書に関する敏活な取引は、古書店を介さないで、如何なる機関によつて行はれるかと云ふに、それは、古書専門の仲介業者の手を経由するのであるが、古書が骨董と共通した性質を一面に持つ関係からでもあらうが、仲介

業者で古書と骨董とを兼ねるものも相当にあり、別に店を開いてあるわけでもないで、云はば移動古書肆、或はもつと適切に表現すれば、持売古本屋とも名づくべきであらう。京城大学に出入する朝鮮古書商は、殆ど全部この種の持売古書店で、大きな風呂敷包を抱いて、大学構内に殆ど毎日のやうに姿を見せている。此の人達が商品を仕入れる方法としては、色々ある。先づ、個人の委託によるもの、これには京城府内からのものあれば、遠く朝鮮各道からのものもある。又積極的に、商人自身地方へ買ひ出しに出かけ、或は愈々品払底に窮すると、府内にある前記の古書店に向いて、顧客に売り附ける見込のありさうな書物を物色する。

たしかに徳富猪一郎(一八六三—一九五七)のように、朝鮮半島における古書店の少なさを汚さなどに延々と文句を垂れつつ、その店頭で古書を物色することを楽しんでいる日本人もありはした⁴⁴⁾。しかし多くの場合、「古書店を歴訪したところで、堆高く積み上げられたもの、中から、これと思ふものを捜し出すことは、先づ殆ど望み薄」⁴⁵⁾などと評される品揃えの悪さもあつて、ここで述べたような持ち込みの古書肆からの購入に頼っていたようである。ところで書籍の入手法としては、手放す意思を示す所有者を探し出すほかに方法があつた。それは、版木を持つ人を探し出し、「一束の紙と銅銭を刷代に持参し序の節に宜敷くと置いてくる。この依頼がいくらか出来るとそこで刷りに取かゝられ製本して手渡しされる」という方法である。奥平武彦(一九〇一—一九四三)は、こうした方法が、二〇世紀以降はともかくも、一九世紀代のうちは、ある程度は実現可能だつたことを述べている⁴⁶⁾。

実は、この方法は、前近代の朝鮮半島では広く採られた頒布方法だつた。たとえば一六世紀代の蔵書家の蒐書方法としては、当時の朝鮮半島には民間の書肆が存在しないので、①国王よりの官版内賜、②知人よりの購入、③知人と書籍の交換、④知人から借用して鈔写、⑤知人に寄贈を依頼、⑥書冊僧(冊僧)を通じての購入、⑦地方官衙にある版木を利用しての印出を地方官衙に依頼、⑧地方官衙の知人の高官にそこにある版木を用いての印出を依頼、⑨中国への使臣に中国書購入依頼などの方法に依つており、このうちもつとも一般的なのは⑦・⑧だつた。その依頼の際は、印出に必要な料紙を持参して摺り出してもらい、その手間賃として紙・米や布を支払うことになつていた⁴⁷⁾。

一旦版を組んだ場合、その保存状態さえ良ければ⁴⁸⁾、印刷の単価は書耕の

雇用費よりも安く済む⁴⁹⁾。まとまった数量の注文さえあれば、版木を有効活用する方策を選ぶのは合理的な選択だつたのである。このほか刷り上がった書籍を製本する必要もあるが、これは自分でもできるし、製本専用の工房も存在していた⁵⁰⁾。つまり、こうした前近代の書籍入手方式が、日本統治期にもある程度は続いていたことになる。

このほか、所有者から本を借りだして、自身で、もしくは書耕を雇つて書写するという方法もあつた。この方法は、全世界で広く見られるもので朝鮮半島特有の方式ではないが、とくに版から増刷する旧来の方式が社会状況の変化によつて機能しなくなつた段階では、以前よりも広く行われるようになったと考えられる。

日本人のなかでもとくに熱心な蔵書家として知られていた今西龍(一八七五—一九三二、京城帝国大学教授)は、自身の蔵書の入手経緯について詳細を記した「蔵書手記」を残している⁵¹⁾。それによれば、書肆からの購入よりも、所蔵者から直接購求したり、借り入れて書写させてもらつてゐる事例の方が目立つ。たとえば「新增東國輿地勝覽」の項には、「写字生岸本父子ニ一枚紙共二十五錢ノ約束ニテ写サシム。実二九十九円九十五錢ヲ要セリ。当時余ハ貧乏甚シ。思フモ棲然タリ」とある。また「諛聞瑣録」の項には、「八木辨三郎氏ガ朝鮮京城ニテ購得セラレシ写本ヨリ、妻まさガ炊事ノ余暇ニ転写セシモノナリ」とある⁵²⁾。気軽に撮影やコピーができない時代において、このような入手方法も広く行われていただろう。

第4節 書店の存在しない背景 識字率と経済水準

これまで、近代前期の朝鮮半島に書店が存在しないことへの違和感が、外国人によつて繰り返し語られ続けたことを見てきた。本節では、そうしたあり方の社会的背景について考えていきたい。

まずは本論に先立ち、比較のために、前近代の周辺諸国における書籍の入手法を確認しておこう。たとえば中国の場合、早い段階では発行主体からの頒布(あるいはその書写)が書籍の主要な入手方法だつたが、唐代には印刷物がある程度市場に出回り、宋代には印刷本も広く流通するようになっていた。そのため唐・宋期には、一部の地域で新刊本(おもに印刷本)の販売をおこなう民間の書店も発生した⁵³⁾。こうしたあり方がより顕著になるのは、明代以降とさ

れる。経済的な発展のなかで、読者層の拡大もあり、御用聞きのように顧客の間を巡回する書僮や、書船などの移動書店も各地に現出してくる⁽⁵⁴⁾。明末くらいからは、新刊本と古書の区別も明確となり、また主要都市に書店街が生じるなど本格的な書籍流通網が形成されはじめ、続く清代には北京の慈仁寺・琉璃廠など有名な書店街が確立する⁽⁵⁵⁾。

一方、日本の場合、印刷本の作製・流布が本格化するのには近世になってからで、それ以前の入手方法は発行主体からの頒布や、所持者同士の借貸・売買が中心だった。ただし中世後期までには、公家や寺社などを巡回して古書売り込む商人が散見されるようになる。同時期には大都市で固定の店舗を持つ古書店が発生していたようで、その種の業者は近世初期までには広く確認できるようになる⁽⁵⁶⁾。こうした業態は、もともと古物商(質屋?)だった業者が、需要の拡大に対応して扱う品物を美術品と書籍に細分化した結果、生じたものと想定すべきだろう。

近世日本における書店については、多くの史料が現存する。たとえば『国史館日録』によれば、林鶯峯(二六一八—一六八〇)も、様々な書店から多数の書籍を購入している。このうち出雲路白水(京都の書肆)は、林が上京した折に訪問することもあるが、おおよそは先方から林の元へと足を運んでいる。白水との取り引きは、彼が林の依頼に合わせて書籍を入手する事例が一般的だった。多くの場合、京都の公家から借り出して書写した新写本を持参しているが、注文された本そのものを入手・持参する場合もあった⁽⁵⁷⁾。

同時期には地方在住の庶民でも、自力で借貸して書写するだけでなく、直接あるいは間接(仲介者を挟んだ遠距離)の各種方法により書籍を入手することが可能な流通網が、全国的に確立していった⁽⁵⁸⁾。このように、社会の需要に応じて書店が発生し、それによって一層、書籍の需要が拡大するという循環をたどるのが、前近代の中・日における書籍流通の基本パターンである。ところが朝鮮半島の場合、近代に至っても、こうした状況は現出していなかった。そのため、京城をはじめとする主要都市を訪れた日本人・西洋人が、口を揃えて、「書店が存在しない(『書籍を入手する方法が分からない』)という不満を述べ立てることになったのである。

つぎに、以上のあり方をふまえたうえで、李氏朝鮮期の朝鮮半島にどの程度の書籍需要が存在したのかについて検討しておこう。これを考える際には、た

とえば識字率が参考となる⁽⁵⁹⁾。識字者のすべてが書籍を購入するとは限らないが、その水準が書籍需要の上限であることは間違いないからである。

前近代の朝鮮半島の識字率について、根拠として示せるデータは存在しない。ただし一九三〇年に朝鮮総督府が行った国勢調査(『朝鮮国勢調査報告昭和五年全鮮編』⁽⁶⁰⁾)によれば、朝鮮人のハンゲル識字率は男性三六・一%、女性八・〇%(平均で二二・三%)だった。内訳を見ると、府部と郡部の差は大きく、また年齢が高いほど識字率の低い傾向が見いだせる。

この調査結果を参考とすれば、二〇年前(つまり一九一〇年の日韓併合時)李氏朝鮮の最末期)の朝鮮半島における識字率を、おおよそ算出できる。李朝末期に若年期を過ぎた年代、たとえば調査時六〇歳以上(併合時四〇歳)では二〇・二%、四〇〜五九歳(併合時二〇〜三九歳)では二六・六%なのに対し、併合後に成長した世代、一五〜一九歳は三三・七%、二〇〜二四歳は三五・一%などの数値を示している。一旦、識字能力を得た人間がそれを失う可能性の低いこともふまえると、李朝末期の識字率(ハンゲル)は最大にみつもって二〇%程度ということになる⁽⁶¹⁾。

ここでいう識字率は、ハンゲルに関する調査結果である。一方、前近代の朝鮮社会においてハンゲルの上位言語とされていた漢字・漢文の識字能力については、残念ながら具体的な統計は残されていない。しかし日本の事例にたとえれば、仮名の読み書きがハンゲルの読み書きに相当することを念頭に置くと、漢字・漢文の読解能力を持つ人は、この数値よりもさらに大幅に低い水準と考えられる。一九一〇年段階における朝鮮半島の戸数二八五〇〇〇のうち、職務上で漢字・漢文を利用する局面が多い官吏・両班・儒生の総計九八〇〇〇戸(『朝鮮総督府統計年報 明治四十三年』)という数値を参考にすれば、漢文を一定のレベルで読みこなせるのは全人口の三%程度だったと推定される。つまり総人口一五〇〇〇〜一六〇〇万のうち、李朝末期の朝鮮社会において、諺文(ハンゲル)で二〇%程度、漢文で三%程度が識字層の割合だった。とくに漢文で書かれた書籍に対する需要が、当時の朝鮮社会において、それを産業として成り立たせる水準に達していないのは明らかであろう。

なお、このように書籍の市販が一般的でない社会において、不要となった書籍は新たな所有者を探して貰えないまま、廃棄処分が付される場合も少なくなかった。李朝期の市について記した史料で、書籍と休紙(再生紙)・反故紙(再



京城（1910年 寺内文庫蔵）

生紙の原料)が一緒の店に並べられているのは⁽⁶²⁾、不要とされた書籍が書籍として再販されないまま再生紙の原料とされていた実態を物語っている。

もう一つ、需要の不足だけでなく、本来それを喚起すべき供給側においても、本格的な書店を立ち上げるための資本が不足していたことも指摘されている⁽⁶³⁾。人口のなかに占める農業従事者の割合が極端に高く、全体に商・工業が振るわない状況で、書籍の刊行・販売に投下されるべき資金が、社会のなかに存在しなかったと考えられるのである。

前近代における識字層の大半(両班・中人)は職務を世襲する場合が多く、必要な書籍の多くは父祖の代から家蔵されていた可能性が高い。つまり社会における書籍の流動性は低いながらも、必要な書籍は場所に配備され続けており、不足による社会の機能不全にまでは至らない状況がギリギリで維持されていた。また彼らは何らかのかたちで政府機構とつながっているの、そのルートをたどれば、新たに官刻された書籍についても、不十分なが最低限の需要は満たせたと考えられる。こうしたことも、出版への資本投下が実現しなかった背景として想定されよう⁽⁶⁴⁾。

参考までに都市商業の規模を示す有力な指標である都市人口を見ておくと、日韓併合の初期において、最大都市の京城(現在のソウル)ですら人口は二七万八千人(このうち一四％は日本人)だった。第二都市の釜山・第三都市の平壤の人口は、いずれも一〇万に及んでいない。こうした状況は、併合当時の朝鮮半島全域で商業が未発達だった実態を示している⁽⁶⁵⁾。さらに遡った近世後期の李氏朝鮮段階では、需要・供給の両面において、本格的な出版産業を生み出す条件が整っていないのが社会的な実態だったのである。



会寧（1913年 寺内文庫蔵）

おわりに 寺内文庫の朝鮮本

以上見てきた通り、近代における朝鮮本は、開国(二〇世紀初頭頃)まで、かなりの安価で入手が可能だった。とくに現地に赴き、一定の期間、腰を落ち着けて蒐書活動を継続した場合、法外な金額をかけなくても、それなりに充実したコレクシヨンの形成が可能だった。戦前の日本人による朝鮮本コレクシヨンの多くは、そうした社会背景によって形成されたものである。

ところで、筆者の勤務する山口県立大学には、寺内正毅の旧蔵書からなる「寺内文庫」があり、そこには日本をはじめとする東アジア地域の古典籍・古文書が所蔵される。このうちとくに注目されているのが、朝鮮半島に由来する所謂「朝鮮本」である。寺内の蔵書のなかに朝鮮本が含まれるのは、彼が朝鮮総督だったことと関係している。しかし、彼が朝鮮総督だったこと、そのコレクシヨンの強奪・略奪の産物であることは、直接に同義ではない。この点、従来の一部の論者は、何の説明もなしのまま非難の理由としてきた感がある。しかし、寺内のもとで蒐書に当たっていた人物の一人である工藤壮平の説明によれば、

寺内は「毎月予算を組んでお金を出して」「日本人の経済からすれば、…紙屑同様」の価格で氾濫していた古書を買集めたのだという⁽⁶⁶⁾。実際、文庫の収蔵品のなかには、そうした購入の事実を記す史料も多数現存している。

本稿で見てきたように、商品経済が未発達だった前近代の朝鮮社会において、本の入手は全般に困難な作業だった。しかし李氏朝鮮の崩壊によって支配者層＝識字層(両班)が蔵書を放出し、とくに併合前後の時期には値崩れ現象すら現出していた。そういう状況ともなれば朝鮮本の入手は容易であり、総督としての政治力を行使して強権的に強奪・略奪する必要などない。寺内は一九一〇年五月に韓国統監(三代)に就任し、韓国併合後は朝鮮総督(初代)となり、一九二六年一〇月に首相となるまでその地位にあり続けた。六年以上に渡って、現地において朝鮮半島と関わりを持ち続けるなかで形成された彼のコレクションは、蒐書活動の継続性という観点のみからも、それなりに充実してしかなるべきである。

従来、寺内文庫の朝鮮本の収集経緯をめぐっては、「政治家の蔵書＝政治的手段・目的の結果」という証明されざる前提に立ち、書籍収集が寺内の個人な営みだったという側面にほとんど目を向けないステレオタイプな理解が広く存在した。また本稿で説明したような、朝鮮本の流通に関する基礎的調査を欠いたまま、根拠のない噂話に依拠した上滑りの議論も目立った⁽⁶⁷⁾。今後は、より実のある議論が求められる所以である。

【注】

1) 関連研究は多いが、近年の成果として押川信久「一五世紀朝鮮の日本通交における大蔵経の回賜とその意味」(北島万次ほか編『日朝交流と相克の歴史』校倉書房、二〇〇九年)・橋本雄「大蔵経の値段―室町時代の輸入大蔵経を中心に―」(『北大史学』五〇、二〇一〇年)・馬場久幸「室町時代の高麗版大蔵経の受容と活用」(『日韓交流と高麗版大蔵経』法蔵館、二〇一六年)などを参照。

2) 和田維四郎『訪書余録 本文篇』(私版、一九一八年)。関連典籍の書誌は、藤本幸夫「朝鮮版『唐略賓王詩集』攷」(『朝鮮学報』一九九・二〇〇、二〇〇六年)・藤本幸夫ほか「続三綱行実図」(『東洋文庫八〇年史Ⅰ 沿革と名品』東洋文庫、二〇〇七年)を参照。

3) 稲田以降の移転経路については、幸田成友「蔵書印」(『書誌学の話』青裳堂書店、一九七九年、初出一九四八年)・反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』(八木書店、一九九〇年)・青木茂「林若樹と木村仙秀」(『書痴、戦時下の美術書を読む』平凡社、二〇〇六年)を参照。このうち、とくに幸田論文に見える稲田の入手経緯は興味深い。

4) 先行研究は多数にのぼるが、とりあえず徳富猪一郎「文禄慶長役以後日本に於ける朝鮮の感化」(『修史余課』民友社、一九三一年、初出一九三〇年)・川瀬一馬「朝鮮活字印刷術の伝来と極初期の活字開版」(『増補 古活字版の研究』日本古書籍商協会、一九六七年)・同「関白秀次の典籍蒐集と金沢文庫」(『日本における書籍蒐集の歴史』ペリカン社、一九九九年)などを参照。

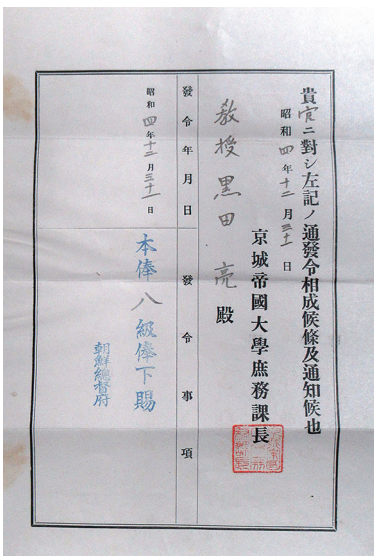
5) 前者については、三木栄「養安院蔵書中の朝鮮医書」(『朝鮮学報』一、一九五三年)・町泉寿郎「曲直瀬養安院家と朝鮮本医書をめぐって」(武田科学振興財団編『曲直瀬道三と近世日本医療社会』同財団、二〇一五年、初出二〇〇九年)を、後者については藤本幸夫「蓬左文庫所蔵駿河御讓本朝鮮本の「御抄」について」(『武家の文物と源氏物語絵―尾張徳川家伝来品を起点として―』翰林書房、二〇一二年)などを参照。

6) 藤本幸夫「日本現存朝鮮本とその研究」(『アジア遊学』一八四、二〇一五年)。
7) 近世日本への朝鮮本の流入に際して宗氏(対馬)が果たした役割については、藤本幸夫「宗家文庫蔵朝鮮本に就いて―『天和三年目録』と現存本を対照しつ―」(『朝鮮学報』九九・一〇〇、一九八一年)・阿比留章子「対馬藩における朝鮮本の輸入と御文庫との関係について」(『雅俗』一四、二〇一五年)などを参照。

8) この禁輸処置は表だったものではなかったが、早く「朝鮮の書は此方に渡す事禁ず」(佐藤成裕「朝鮮書籍」『中陵漫録』)と指摘されるとおり、一般の日本人にも認識されていた。このような処置が取られた背景については、中村栄孝「柳成童家の壬辰・丁酉倭乱史料」(『日鮮関係史の研究』中)吉川弘文館、一九六九年)・同「朝鮮の日本通信使と大坂」(『日鮮関係史の研究』下)吉川弘文館、一九六九年、初出一九六四年)などを参照。

9) 藤本注6論文。おもなコレクションについては、本稿の末尾に参考資料として付載の前問論文を参照。
10) クーランの履歴については、坂出祥伸「M・クーランと『パリ国立図書館

- 所蔵漢籍解題目録」(『東西シノロジー事情』東方書店、一九九四年、初出一九九三年)を参照。
- 11)以下、Maurice Courant『Bibliographie coréenne』(El.roux、一八九四〜九六)の該当部分の訳は、モリス・クーラン／浅見倫太郎訳「古書訪求ノ困難」(『朝鮮芸文志』朝鮮総督府、一九二二年)による。なお全訳は、モリス・クーラン／小倉親雄訳「朝鮮書誌序論」(『朝鮮』三〇四、三〇八〜三二五、一九四〇〜四一年)に掲載される。
- 12)外交官としての竹添については、松崎鶴雄「竹添井井翁に就て」(『柔父隨筆』座右宝刊行会、一九四三年、初出一九三四年)・甲斐政治「文人外交官竹添進一郎―知る人ぞ知るその真価―」(長谷川才次編『歴史残花』善本社、一九七六年)などを参照。
- 13)三浦兼助『朝鮮紀行―明治癸卯―』(其中堂書店、一九一七年)。
- 14)葛生能久「竹添進一郎」(『東亜先覚志士記伝下』黒龍会出版部、一九三六年)・松崎注12論文。
- 15)徳富蘇峰「上方の春色」(『関西遊記』民友社、一九二九年)・川瀬一馬「静嘉堂文庫」(『日本における書籍蒐蔵の歴史』ペリカン社、一九九九年)。
- 16)書籍の場合、楊守敬(一八三九〜一九一五)の事例が著名である。その成果は、楊守敬撰『日本訪書志』にまとめられている。
- 17)宮崎道三郎「朝鮮語と日本法制史」(『宮崎先生法制史論集』岩波書店、一九二九年、初出一九〇四年)・小倉進平「朝鮮古書の国外転出」(『文芸春秋』一六七、一九三八年五月)。
- 18)齊藤兼蔵「初代琳琅閣主人とその周辺」(反町茂雄編『紙魚の昔がたり明治大正篇』八木書店、一九九〇年、初出一九三四年)。
- 19)白鳥庫吉「訪書談―主として朝鮮本に関して―」(『白鳥庫吉全集一〇』岩波書店、一九七一年、初出一九一〇年)。
- 20)古家実三「古本仕入旅日記四」(『日本古書通信』二二八、一九六二年)。
- 21)齊藤注18論文。
- 22)三浦注13論文。
- 23)前近代の中国でも、書籍を収集する際、売り込みを求める広告を出すことがあった(大木康『明末江南の出版文化』研文出版、二〇〇四年)。こうした方式が必要となれば、持ち込みが本格化するまでに一定の時間がかかることは避けられず、一〇日程度の滞在期間しかなかった三浦の場合、十分な成果が得られなかったことはやむを得ないだろう。
- 24)小林静生編『東京古書組合五十年史』(同組合、一九七四年)。なお本書は、村口の最初の渡航を「明治四十二、三年頃」とするが、その際に彼が仕入れたと覚しき朝鮮本が、明治四十二年(一九〇九)一月二日付で学習院へと売却されているので(村松弘一「書籍と文物がたぐ日本と東アジアの近代―学習院大学コレクションから―」大沢顕浩編『東アジア書誌学への招待―』東方書店、二〇一一年)、一九〇九年以前と推定される。
- 25)村口が朝鮮半島での仕入れにこだわっていたことをめぐっては、すこし後の時期の話となるが(西園寺)侯は散歩の途次、村口書房にしばしば立ち寄ったが、侯から、朝鮮で中国の古書をさがしてこいと教えられ、寺内正毅総督への紹介状を与えられた(脇村義太郎『東西書肆街考』岩波書店、一九七九年)という情報も参照。
- 26)古家注20論文。
- 27)たとえば早川喜代次「支那事変の頃より」(『徳富蘇峰』徳富蘇峰伝記編纂会、一九六八年)などを参照。
- 28)彼の最初の渡航に関しては、古家実三「古本仕入旅日記 四〜五」(『日本古書通信』二二八〜九、一九六二年)にまとめられるほか、藤原昭三ほか「古家実三日記七(一九一二年一〇月四日〜一九一三年一月三日)」(『古家実三日記研究』七、二〇〇八年)の一九一二年三月一八日条〜四月三日条にも関連記述が残されている。
- 29)藤田亮策「吏文と吏文輯覧」(『朝鮮学論考』開明書院、一九六三年、初出一九四二年)・今西龍「蔵書手記」(『高麗及李朝史研究』国書刊行会、一九七四年)などに、彼からの古書購入の記事が見え、朴が広く日本人研究者を対象



とした販売網を持っていた人物であることを窺わせる。安倍能成「壺辺閑話」（鄭大均編『日韓併合期ベストエッセイ』筑摩書房、二〇一五年、初出一九三七年）に見える「今西龍博士などは大分ひいきにして居られた」「古本を主として時には書画骨董の類をもどこからか持って来」る「朴某という男」も、彼のことであろう。蔵書家として知られる黒田亮（一八九〇—一九四七、京城帝大教授）が、朴の貧しい葬式に参列したことも（大塚鑑「あとがき」『庚松園文庫朝鮮本目録』同人、一九五九年）、そうした交流の結果と考えられる。30）齊藤注18論文。庄司浅水・反町茂雄「対談 明治の蒐書家たち」（『定本庄司浅水著作集 書誌篇八』出版ニュース社、一九八一年）で、反町も同様のことを述べている。

31）楠林安三郎「業界生活四十年の回顧」（反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治・大正篇』八木書店、一九九〇年）。

32）藤本幸夫「日本現存朝鮮本とその研究」（『アジア遊学』一八四、二〇一五年）。なお、この時期に形成された主要コレクションについては、前掲恭作「朝鮮の板本」松浦書店、一九三七年、初出一九一四年）に詳しい。参考資料として、該当箇所を本論文末尾に掲載したので参照されたい。

33）古家実三「古本仕入れ旅日記二三」（『日本古書通信』二三八、一九六四年）。34）ただし日本人資本の書店に、朝鮮人の経営する書店が圧倒されたとする見解は、実態とやや異なるようである。たとえば奥平武彦「京城の書肆」（『帝国大学新聞社編『文化と大学—法学随想』帝国大学新聞社出版部、一九三五年）は「翰南書林が二十八九年前に店を始めた。京城の両班の家蔵書は大抵探し尽されて、今は地方特に忠清道の両班の売払ふものが入荷する」と述べる。これによれば、古家が「学識もあり風貌も学者らしい感じのする人」（古家実三「古本仕入れ旅日記五」『日本古書通信』二一九、一九六二年）と評する白斗鏞（翰南書林）が、古書業界でとくに大きな役割を果たしていた実態が確認される。

白と日本人の関わりについては、たとえば前掲恭作が「覓書尺存」と題して彼から購入した朝鮮本の目録を残していることや（白井順「前掲恭作の学問と生涯」風響社、二〇一五年・藤本幸夫「東洋文庫所蔵朝鮮本について」東洋文庫編『アジア学の宝庫、東洋文庫』勉誠出版、二〇一五年）、徳富蘇峰が「朝鮮所得簿」（徳富蘇峰記念塩崎財団編『徳富蘇峰記念館所蔵 民友社

関係資料集 別巻』三二書房、一九八五年）のなかで白に関して多数記録している点などからも知られる。このほか、三木栄「『山林経済』を通して前間先生を偲ぶ」（『書物同好会会報』一五、一九四二年）も、白との思い出を記録している。

35）中村栄孝「朝鮮史の編修と朝鮮史料の蒐集—朝鮮総督府朝鮮史編修会の事業—」（『日鮮関係史の研究下』吉川弘文館、一九六九年、初出一九五二年）・箱石大「近代日本史料学と朝鮮総督府の朝鮮史編纂事業」（佐藤信ほか編『近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社、二〇〇七年）。

36）たとえば今村頼「蔵書漫談」（『書物同好会会報』六、一九三九年）は、この頃の状況として、「田舎に父祖の集めたものを大事に保存して居る家が二三ある」くらいで、それ以外、朝鮮人の蔵書家というのが見当たらない状況で記している。奥平注34論文の「古書を所有してゐるのが両班階級に限られてゐることに中流階級のなかつた李朝の社会の断層が現示される」という指摘も参照。

37）本間九介「朝鮮雑記」（春祥堂、一八九四年）。

38）鮎貝房之進「回顧談」（『書物同好会会報』一七、一九四二年）。

39）森山美夫「朝鮮の出版及読書界」（『朝鮮』一九一三年四月号）。

40）新刊書を扱う書店については、とくに併合後、加速度的に増加している。

沖田信悦「朝鮮へ渡った古本屋たち」（『植民地時代の古本屋たち—樺太・朝鮮・台湾・満洲・中華民国空白の庶民史—』寿郎社、二〇〇七年）などを参照。

41）白鳥庫吉「訪書談—主として朝鮮本に関して—」（『白鳥庫吉全集 一〇』岩波書店、一九七一年、初出一九一〇年）。

42）鮎貝房之進「回顧談」（『書物同好会会報』一七、一九四二年）。なお、これに関連して下郡山誠「故房之進叔父上の面影」（落合亮編『鮎川房之進』気仙沼ユネスコ協会、一九九九年）は、「古書は京城では数軒の本屋を除けば有名な大学の金允植氏とか魚氏とか、また内官（宦官）の家などに相当所蔵されて居たので外出嫌いの故人も進んで行き、閲覧を乞うたり買ひ受けたりした様でした」と述べている。

43）黒田亮「朝鮮刊本概観」（『朝鮮旧書考』岩波書店、一九四〇年）。

44）徳富猪一郎「朝鮮の古書肆」（『野史亭独語』民友社、一九二六年、初出一九二二年）・同「朝鮮本について」（『読書九十年』大日本雄弁会講談社、

- 一九五二年)。
- 45) 黒田 注43論文。
- 46) 奥平 注34論文。
- 47) 藤本幸夫「印刷文化の比較史」(『アジアのなかの日本史VI 文化と技術』岩波書店、一九九三年)・同「朝鮮読書人と書籍入手」(『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』一三、二〇二〇年)。
- 48) 耐久性は版の材質によって異なるが、藤本 注47論文によれば、銅活字で一〇〇部前後、木版で四〇〇部くらいの印刷が一般的だった。
- 49) 中国の事例だが、銭存訓／久米康生訳『中国の紙と印刷の文化史』(法政大学出版局、二〇〇七年、原著二〇〇四年)によれば、紙・墨などの材料費に彫版工費を加えても、おおよそ手写本の1割の費用で済んだ。
- 50) 石井研堂「朝鮮本の綴ち方」(『古本屋』五、一九二八年)は、この頃まで、朝鮮の伝統的な製本工房がまだ残っていた状況を紹介している。
- 51) 今西龍「蔵書手記」(『高麗及李朝史研究』国書刊行会、一九七四年)。
- 52) こうした入手経緯をふまえ、田中俊明「今西龍」(江上波夫編『東洋学の系譜 第二集』大修館書店、一九九四年)は、「韓国で、文化財返還問題、すなわち日帝期に日本人が略奪した文化財の返還を求めよう、という動きがおこり、その際に今西の旧蔵書などもやりだまにあげられることがあるが、それは問題である。蔵書の多くは、今西がアルバイトを雇って原本から騰写させたものである」と指摘する。
- 53) 張紹勳／高津孝訳『中国の書物と印刷』(日本エディタースクール出版部、一九九九年、原著一九九二年)。
- 54) 井上進『中国出版文化史―書物世界と知の風景―』(名古屋大学出版会、二〇〇二年)・大木康『明末江南の出版文化』(研文出版、二〇〇四年)。
- 55) 一ノ瀬雄二「清代琉璃廠書肆に関する一考察―朝鮮使節の記録を中心に―」(『史泉』六七、一九八八年)・稲森雅子「一九三〇年代の北京古書肆―目加田誠留学日記『北平日記』から辿る―」(『中国文学論集』四三、二〇一四年)。
- 56) 山本信吉「室町時代の古本屋」(『古典籍が語る―書物の文化史―』八木書店、二〇〇四年、初出二〇〇一年)・長友千代治「貸本屋略史」(『江戸庶民の読書と学び』勉誠出版、二〇一七年、初出二〇〇八年)・橋口侯之介「江戸時代の本屋というもの」(『江戸の古本屋―近世書肆のしごと―』平凡社、二〇一八年)。この点の詳細については、別稿を予定している。
- 57) 宗政五十緒「出雲寺和泉掾―禁裏・柳營の御書物師―」(『近世京都出版文化の研究』同朋社出版、一九八二年、初出一九八〇年)。勿論、このほか、新刊販売も行っている。
- 58) たとえば大和博幸「江戸時代広域出版流通の形成と発展―基礎的考察―」(『江戸期の広域出版流通』新典社、二〇一九年)は、地方在住者が知人・飛脚・書店などを通じて三都の出版元から希望する書籍を取り寄せた実態を指摘する。
- 59) 「識字」といった場合、自分の名前をどうにか書ける程度のレベルから、文字を十分に読み書きできるレベルまで千差万別である。そのため現在では、識字のレベルを区別した検討が重視されるが、ここではデータ不足もあって、そこまで厳密な分析は行わない。
- 60) この調査については、木村光彦「韓国(朝鮮)における初等教育の普及―一九一―五五年―」(『アジア研究』三四―三、一九八八年)・板垣竜太「植民地期朝鮮における識字調査」(『アジア・アフリカ言語文化研究』五八、一九九九年)などを参照。
- 61) 木村 注60論文は、各種の傍証も根拠として、この調査で「ハンゲルの読み書きができるか」を口頭で質問する方式を採った結果、実際よりも多くの人々が「識字能力がある」と返答した可能性も指摘する。
- 62) 田川孝三「貢吏の動向と商人」(『李朝貢納制の研究』東洋文庫、一九六四年)・吉田光夫訳註『漢京識略―近世末ソウルの街案内―』(平凡社、二〇一八年)。朝鮮における紙の再利用については、川西裕也「朝鮮時代における文書の廃棄と再利用」(『韓国朝鮮文化研究』一二、二〇一三年)を参照。
- こうしたあり方は、日本統治期にも継続していく。たとえば古家実三「古本仕入旅日記(二四)」(『日本古書通信』二三九、一九六四年)は、「京城雑記 五月十二日(大正十二年) / 街をぶらぶら歩いてみると花園町というところの屠物問屋の軒下に荒縄でしばった仮綴の本がうづ高く積まれているのがふと目に止まった。：試に値段を聞いて見ると洋紙本は一貫七拾銭、朝鮮本は百匁が五拾銭だという。反故値段から言えば約十倍だが、大部分は何とかなりそうなものが多い。腰を落ち着けて約九貫目(約三十一キロ)を舐り出した。：聞けば朝鮮総督の××課の払下げ品であった。若し吾輩の目に止まら

なかつたら是等の良書はあたら製紙原料として潰されてしまうところであつた。」と記している。

また末松保和「書影」第二輯の後に「『書物同好会会報』二、一九三八年）も、「今年の春頃から、朝鮮古槧本や朝鮮古活字本の残巻が、しきりと世に出て来た様に思ふ。自分はそれを傍観して、妙な現象だと考へた。聞けば朝鮮紙の古紙を売買する商人が、買ひ入れの範囲を地方に広め、最近は慶尚道方面にまで及ぼした結果、該地方の古本が、すくなくならず京城に集められた。その大部分は一貫目いくらで原料として取引される運命を擔つたが、一貫目いくらで売り払ふ方が利益多いと思はれる様なものは抜き出して、古本として捌かれたのである」と記している。「わが国ほど他の物に比べ大変安価に、まるで捨て値で、売っている国もまたない」（安春根／文嬾珠訳「古書の特徴」『図説 韓国の古書 本の歴史』日本エディターズスクール出版部、二〇〇六年、原著一九九一年）という指摘も、こうした伝統と関係する可能性があるかもしれない。

63) 藤本幸大「朝鮮の印刷文化」(『静脩』三九—二、二〇〇二年)・同注47論文。
64) たとえば印刷業の場合、工人は基本的に政府の指示に従って印刷するだけの状態が長く続いていた。その生産品が、小規模ながら商品として市場に出回り始めるのは、ようやく一八世紀後半以降とされる。李佑成／旗田巍監訳「一八世紀ソウルの都市的様相—実学派、とくに利用厚生派の成立の背景—」(『韓国の歴史像—戦乱を生き抜いた人と思つ—』平凡社、一九八七年)を参照。

65) 木村光彦「韓国併合時」(『日本統治下の朝鮮』中央公論新社、二〇一八年)。
66) 李英介「夢遊桃源図巻と寺内文庫—韓国文化財回想録—」(『日本美術工芸』四四七、一九七五年)。
67) 渡辺滋「寺内正毅をめぐるイメージの拡散過程—寺内文庫とその収蔵品に関する問題を素材として—」(『山口県立大学 国際文化学部紀要』二七、二〇二一年)。

参考資料：前掲著作『朝鮮の板本』（松浦書店、一九三七年、初出

一九一四年）。

近年日本人の手で集まりました朝鮮本のことを少しく申し上げます。私の知つてゐます範囲では分量の最も多いのは佐藤六石氏の蒐集であるやうでございます。これは明治三十八九年から四十二年までの間に集まったもので九百五十種五千冊程のものでございます。其内で写本が百五十種五百冊位はあるやうですから板本は八百種四千五百冊といふ計算でございます。此蒐集は最も普遍的で奎章閣の蒐集程豊富でありませんが、殆んどこれに似寄つたもので、写本は別として中々完備した蒐集のやうに存じます。翻刻本が其内に五十部四百五十冊に上るやうでございます(この佐藤氏の蒐集は其後全部大阪の府立図書館に入りまして今誰れにも見られませんことは誠にうれしく思ひます)。

次に南満鉄道会社の蒐集がでございます。これは白鳥庫吉博士の指導で明治四十二年頃に短時日の間に蒐集せられましたものでございます。全部六百種三千冊程で内百五十種千冊程は写本になつてゐまして、(この写本はこの蒐集の最も価値あるものでございます)板本は四百五十種二千冊程のやうです。此蒐集の中には随分珍籍を含んで居りますが、何分短日月の蒐集でございますために、雑駁な蒐集と申すことを免がれませぬのは如何にも残念に存じます(この蒐集は満鉄から東大図書館に移り「白山黒水文庫本」といふ名で学界に大貢献をなしつゝ、あつたのですが震災で残らずなくなつたことはこんなに残念なことではありません)。

それから浅見倫太郎氏の蒐集がでございます。これは現在三四百種二千冊程のものかと存じます。同氏が明治三十九年から今に自らその蒐集をつゞけてゐられますもので、写本は総数の三分の一位はあるやうに思ひます。この蒐集は同氏が最も精選を加へられた結果に出来ましたもので、各種の蒐集中に於て自ら異彩を有して朝鮮文献の美麗な標本を見るやうな気がいたしました(この蒐集は大正末年に三井家に譲り受けられ、今大井町のその書庫にあります。只今の処ではその書庫は誰にも見ることも出来ないことになつてゐますのは遺憾です。しかしその内公開の機運が来るものと信じます)。

又河合弘民氏の蒐集がでございます。これも浅見氏と殆んど同時頃からの蒐集で同じく三百種以上の蔵本があるやうです。金沢博士の蒐集はその大部は板行目録にはいつてゐますから申しませんが、言語に関する珍本を含んで居ります。又幣原坦博士の蒐集がでございます。これは明治三十七八年代京城で集められた

もので四百種程のものと存じます。写本がその過半を占めて史籍に属しませんが、多いやうでございます。

此外にも類似の蒐集がありますと存じますけれども私のよく存じて居りますのは先づこんなものでございます。尚ほ一つ明治四十一年前後に統監府で集めました朝鮮本がございます。これば部数二百以下と存じます。中には随分珍籍もはいつてゐますが一体に雑駁なものでございまして、今は宮内省その他に移つてゐるやうに承知いたして居ります。またこれと同時に故曾祢子爵が写本を蒐集せられたことがございます。之は百種内外のもですが、何分内容を精査せずに蒐められたので、通行板本よりの騰写本、家蔵文稿の見るに足らないやうなものも多く交つてゐまして比較的価値の少ないものでございました(内地でその後目立った蒐集としては京大の蒐書があり、京大で震災後に求められた相当の蒐書があり、また東洋文庫にも諺文小説の多数其他の購入があり、又図書寮にも旧来のもの、外に故五味均平氏が事務官のとき二百種ばかりも購入してゐます。その外にも蒐集はなほ処々で行はれたと思ひますけれども、分量はいづれも左程大きいものはないやうに存じます)。